

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。

## 勤息上人を憶ふ感想

梅 村 舜 道

私が勤息上人を知つたのは今から二十年程も昔、東京の小石川の宗大の前身へ入學した當時からのことであると思ふ、其當時傳通院の横手のコートで下手なテニス  
の練習に出掛け、折々傳通院の庭内へボールが飛び込むのであつたが、或時學者で勉  
強家であつた上人の忌諱に觸れて、ものゝ一時間も叱かられた事があつたが妙に忘  
れられぬ、其後上人の懇篤なる御法話を一二回拜聽したこともあつたが、不幸にして  
上人より纏まつた御教授を受ける機會はなかつた、併し一夏予等一行の加行の御尊  
師でもあり、御講師でもあつた所から大分有り難いことも聞いた筈だが、大抵は忘れ  
てしまつて此れと云ふては残つて居らぬやうだ、併し東京を背景としたる長い學生  
生活から俄かに羅漢然たる佛道修行の一夏四旬は何とも言へぬ宗教氣分を今に喚

び起さしめる。上人は東京と京都共に縁故の深い方だが、予は其後京都東山に奉職して居る時御眼に懸かつて御話したのと、今東京の陸軍士官學校の教官を勤めて居るゝ大村君と一所に清水坂を散歩して居つた時に偶然に御出遇ひしたのとより記憶に残つて居ない。

實を云ふと、上人が御在世の時は左程にも感じなかつたやうだ、所が上人が昨秋溘焉として往生の素懷を遂げらるゝことゝなつた時には俄かに宗界の寂寞を感じるやうになつたのである、もう己に故人となられた、黒田老師が例の奥深き義のある如き面持で、吾人に對して諸君は宗乗の研究するのは、一の學風をつくるやうにするがよい、つまり、「一見宗乘學者の様に見えるやうになるがよい」と云はれたが、爾來十年茫々たりで、僅か宗祖の御眞意は現代に照らして何處にあるかな！と云ふことは努力をおしますつとめて居る積りであるが、扱て老師の云はれたる、「一見宗乘學者に見えるやうに」と云ふことは甚だ以て覺束なき次第である。唯念佛はやつて居るが、勤息上人の御遷化に由りて此の一見宗乘學者に見えるやうにと云ふ古色を帯びたる宗學者の凋落を感じることは甚だ深いのである。

勤息上人に對する感想や、逸話は亦諸方面から御述べにならうと思ひますから此れ

位で御免を蒙りますが、私は一寸將來の宗學界と狀勢に就いて鄙見を陳述したいと思ふのであります。

凡そ大偉人の追憶と哀悼とは、唯徒らに是を悲むと云ふのみにてはその眞意を得ないことである。殊に宗教者を追憶し哀悼するには一層斯の眞意を發揮する覺悟が無くてはならぬこと、惟ふ、大覺世尊は、却つて別を惜み悲む徒弟を誠めて逢ふて別れざること終に得べからずと教へ、今より已後我が諸の弟子展轉して我が平生の教訓を行へば、此が我が眞の法身常に世に存生して失滅せないのであると高教を垂れ玉ふた。我が吉水大師法然和尚は、我が往生は一切衆生のためである、世は無常なり、濁亂である、須らく悉く念佛せよ、眞實相逢ふ處は常住の樂土法王の家であると示された。吾人は此の意味にて、常に先賢の跡を眺めたい、その努力と其の芳蹟は永く徳として感謝せなければならぬけれども、後人は自ら後人の任務のあることを忘れてはならないこと、と思ふのである。

時機を叩きて行運に當ると宣して、聖道自證の門に對して淨土教の幟を高く翻して他力の願海に投せられたる聖法然の末徒は亦須らく、常に時機に投じて彌陀の願力を光顯する覺悟がなくてはなるまい。如何に科學が發達しやうが、哲學の思索が進

もうが、一たび開きて永く閉ぢざる念佛の法門は愈々其の光りを放たなくてはならぬことと思ふ。吾人は電車や電話や電信の通するを見て、此を魔法として驚くこと無く、須彌説が太陽系統説に轉じたからとて直ちに佛教的世界觀の破滅を恐れること無く、却つて此の思想の推移、文化の遷轉、世界觀の變化に即して、佛光の増々鮮かならむことを希はねばならぬことと思ふ。否、無量壽の願力は必ず斯くあらねばならぬのである。吾人は教界の一大轉機が近く將來さるゝことを信じて疑はぬのである。其の如何なる形に依つて現はれて來るかは今豫め斷することは難いやうであるけれども、一言にして此を云へば、淨土門はもつと々々俗了するであらう。古典的な、そうして實社會と沒交渉な宗學風は一面尊い所はあるに相違なからうけれども、將來の人生否現代は餘りに宗教を求むることが單的である。亦固より宗教は單的であり、直接的なものであるのがその本來であつて、迂路曲折の學究ではない、特殊境遇家の占治すべきものであつてはならぬ。然れども宗教は亦特殊高邁の風光を存しなければならぬ。此は學究ではなく、一大現證でなければならぬのであるが、此の高邁の現證は直ちに實人生に即して、光りとなり、力となり、そうして此が普く通する所に、眞の宗教の存在價值があると云はねばならぬ。予は此に就きて、淨土教が實人生に即したる現證的

特質につきては別の機會に述べて見たい考へであるが、聖法然の跡を辿りて、時機を叩きて光悅を頌へむとする淨土教徒は、立所の現當を觀照して、おごる權びを現前不滅の願王にまでさゝげねばならぬことと思ふのである。(一、二、四としこせるあした)

## 勤息僧正を偲びて

前 田 聽 瑞

勤息僧正は明治の淨土宗が産んだ佛敎學の權威者であり、また稀れに見る徳者でもあつた。もし、明治高僧傳が編まれたら、差詰めその數頁は僧正のために費やされることだらう。

私は不幸にして教壇上の僧正を知らない。昆布茶を飲みながら得意の俱舍論を講せられた僧正は一向知らないが、明治四十年の眞夏に私は僧正を傳燈師と仰いで加行にとりかゝつたのであつた。此點から見ると、僧正は實に私に取つて最も思出の多い人である。今その「追悼號」を編むに當つて、一私人としての感慨の念を述べることにも敢へて不當ではあるまい。

今から十五年前、加行僧であつた私共は東京は小石川の傳通院の奥座敷で、僧正得